

「あなたの大切な方も、一緒にどうぞ」という、パーティ招待状

性的マイノリティ～アメリカで、イギリスで、カナダで

健太郎さんへ

武田裕子（医師・医学部教員）

つぶさにお話しされるのには、つらい部分もおありだったと思いますが、ご自身の経験を分かち合ってください、率直なお気持ちをお聞かせくださってありがとうございました。

私は医師で、1990年から約5年間米国ボストンの病院で内科研修を受けました。当時は、まだHIVの治療が今ほど確立しておらず、多くのAIDS患者さんの診療にあたりました。パートナーや家族に見守られて亡くなったかたも少なからずおられました。

パートナーがHIVと診断されたとき、もうお一人は罪悪感に苦しむというのは、研修で最初に学んだことのひとつでした。

ボストンでは、性的マイノリティの方とたくさんお会いしました。ハーバード大学の教育病院でしたが、LGの同僚も少なくなく気軽に、そうだと話してくれました。尊敬する指導医の先生方が同性のパートナーを愛情いっぱいに紹介して下さることもありました。

パーティーの招待状には significant others（あなたの大切な方）も一緒にどうぞと書かれていて、配慮を感じました。

2010年から3年間はロンドンに留学しました。多様性が尊重される社会で、LGBTへの偏見を含んだ言葉や表現は一切耳にしませんでした。宿舎にある教会のチャプレン（牧師）は女性で、宿舎内に同性のパートナーの方と暮らされており、当たり前と一緒に行動されていました。ご自宅にもよく招いてくださいました。

この10年ほど親しくご指導いただいているカナダの医学部の教授は、家族ぐるみのお付き合いですが、同性のパートナーと正式にご結婚されすてきな家庭を築かれています。大学でもたいへん尊敬されており、LGBTの方もそうでない方もたくさんのすばらしいご友人がおられ、私にも分け隔てなく紹介してくださいます。

私の娘は13歳ですが、出会った3歳のときから God Parents として可愛がっていただいています。娘が10歳くらいのときに、お二人は女性同士で結婚しているの？と尋ねたので、まったく同じ人間がこの世にいないように、神様は私たち一人一人を特別な存在としてつくられたと話しました。カナダのご自宅に何度も泊めていただき、家族として慈しみあいながら暮らすお二人に優しく接していただいた娘は、この先生方との出会いを通して多様な社会が当たり前だと理解したようです。

2013年から約1年間、20年以上前に研修したボストンの病院に研究員として再び戻りましたが、医療者としてLGBTの方に配慮すべきことが、さらに積極的に学生・研修医

の教育プログラムのなかで取り上げられており感銘を受けました。

LGBT の若者の自殺率が同年代の 2-3 倍であることや、ホームレスの方々の 20-40% が LGBT であるということ、アルコールや薬物依存のリスクが高く、がん検診や性感染症の予防・治療が受けにくい状況にあるにも関わらず診療機関受診に様々な障壁が存在することなどを学びました。自分の認識が不十分であったことにあらためて気づかされました。LGBT の方々は、sexual orientation や gender identity についてはっきりと尋ねてほしいと思われているという調査結果とともに、診療の際にどのような言葉で質問するのが相手を傷つけないかなど実践的な指導も受けました。

野球のレッドソックスの本拠地であるフェンウェイ球場の近くに、Fenway Health という医療機関があります。お世話になった指導医の先生や同僚、後輩がたくさん働いているのですが、組織のなかに The National LGBT Health Education Center という部門があります。特に LGBT コミュニティの健康に取り組み、診療や教育・啓発活動を行っています。英語で恐縮ですが、リンクをご紹介します。

(<http://www.lgbthealtheducation.org/>)

医療者や学生、研究者、為政者向けに様々な教材を作成しています。

(<http://www.lgbthealtheducation.org/publications/top/>)

なかでもフェンウェイ・ガイド(Fenway Guide)という教科書は、米国内科学会から出版され、LGBT の方たちの健康ニーズについて詳しく紹介するとともに、そうした方々が疎外感を抱くことなく安心して受診でき、適切な医療を受けられるように作成され、広く活用されています。

([https://www.acponline.org/newsroom/fenway\\_guide\\_book.htm](https://www.acponline.org/newsroom/fenway_guide_book.htm))

医師として、また大学教員として、性的マイノリティの方たちのために積極的に発言したいという思いをもって、昨年帰国しました。現在は、LGBT に対する偏見を耳にするたびに会話を持つようにしています。

しかし、今回、健太郎さんのお話を伺って、それでは全然足りないと分かりました。健太郎さんがお母様にご自分のこととお話しになられるときに、「ごめんね」と言われなくてはならなかったとお聞きして、胸がつぶれそうでした。健太郎さんのご家族やご親族は、その後暖かく受け入れてくださったとのことですが、一方、LGBT は怖くて隠れている、LGBT の子供が死んでいるとも言われていましたね。日本はまだそんな状況なのかと、驚き愕然としました。理解が広まるように、今後も機会あるごとに話し、米国のように医療者教育に導入していきたいです。

初めてのスピーチとおっしゃっておられましたが、お話しくださって本当にありがとうございました。

アメリカもイギリスも、暗黒の時代があって今に至りました。きっと日本の社会も変わります。少しずつですが変わりつつあるのを感じます。健太郎さんの活動を心から応援しています。相方さんも、きっと嬉しく誇らしく思われていらっしゃることでしょう。どうぞお身体に気をつけて、これからも発信を続けてください。